【シンポジウム報告】

生活から学ぶ共同の〈知〉
―「生活をつづる会」の時間・空間をめぐって―

猿山　隆子

Collective “Knowledge” to Learn in the Everyday Life :
Time and Space of the Writing Group “Seikatu o Tsuzuru Kai”

Takako Saruyama

本発表は、小集団のなかで、身近な生活を書きあい、話しあうことを手立てとした学習サークル「生活をつづる会」が、活動のなかでどのように学習の場を作り出したのか、「生活をつづる会」の学習組織形態とその学習過程を明らかにすることを目的とする。

1950 年代前半に急速に広がった生活記録運動については、これまで多様な実践と展開が言及されている。その中で、女性の生活記録運動としてしばしば取り上げられるのが「生活をつづる会」である。「生活をつづる会」とは、1952 年に、社会学者である鶴見和子（1918 年～2006 年）が自ら組織した生活記録サークルであり、その著作や文集の刊行によって、「主婦」たちが日常生活を書きあい、話しあうことによる学習とその成果を広く知らせ、その当時も「主婦」の生活記録運動のモデル的な活動として、メディアで取り上げられるなど世間の大きな注目を集めた。

鶴見が取り組んだ生活記録運動は、1950 年代初頭に注目されていた子どもの生活綴方教育の思想と実践から着想を得て、「おとなの生活綴方」として取り組まれたことはよく知られている。鶴見は、生活綴方教育を、集団のなかで、読む、書く、話す、聴くことの行為の繰り返しを通じて獲得される思考形成の方法として把握していた。「よりよく生きるため」に、他者とともに生活を見つめ、思考を鍛え上げていく方法として、おとなの自己形成や共同形成にまで及ぼすことができるものとして考えていたのである。

しかし、制度として厳密に管理された時間・空間の下におかれた学校教育で行われる生活綴方と、「指導者」の存在を否定し、誘導や統制されない、本来、自発的な集団のなかで行われる生活記録とは、その学習組織や方法はまったく異なる。それにも関わらず、子どもの教育方法として提起された生活綴方と、鶴見が提示したおとなの自己教育の方法としての生活記録は、十分自覚的に区別されていたとは言いがたい。そのため、さまざまな生活記録の活動の所々で、当時の鶴見がとらわれていた啓蒙的な思考を読み取ることができる。鶴見は、子どもの教育方法に倣った「おとなの生活綴方」とおとなの自己教育の方法との矛盾と葛藤の狭間でゆれていたのである。

では、鶴見が取り組んだ生活記録運動はどのような学習組織のなかでどのような活動に取り組んできたのか。本発表では、「生活をつづる会」における例会での話しあいの場を中

心に取り上げる。これまで生活記録運動に言及した研究では、小集団での話し合いを通じて生活記録を書いていく過程を共有していくということがその特徴として捉えられている。しかし、生活記録運動について検討したものは、文集に掲載された生活記録を引用したものや言及したものが多く、当時の話し合いの実践やそのプロセスを具体的に検討したものに関して、その蓄積はほとんどない。「生活をつづる会」に言及したものに関しても、文集に掲載された生活記録の作品の分析や鶴見の著作に言及したものが主であり、これまで、話し合いのプロセスは明らかではなかった。そのため、どのような話し合いの過程を経て生活記録の作品が生まれたのか、その学習活動のプロセスが読み取ることは難しい。集団のなかで、書く、読む、話す、聴くというサイクルをもつ生活記録運動の学びを理解するためには、生活記録を書いていく過程を共有していく話し合いの方法やそのプロセスを考察することが必要である。

このような状況をふまえ、本発表では、「生活をつづる会」で行われた例会の話し合い記録とその成果である生活記録の文集を合わせて読むことで、「主婦」たちが、生活や自己を基軸に、小集団のなかで他者とともに書き合い、話し合うことによって、どのような学びの場を作り出したのか、「生活をつづる会」における学びの時間・空間を明らかにすることを目的としている。

まず、「生活をつづる会」で行われていた例会の話し合い記録から、「生活をつづる会」の組織形態を分析する。メンバーの多様性を特徴としたひとつのサークルとしての発足から、メンバーの自発性を重視し、地域別、職業別のグループづくりに活動の主体をおくようになっていく組織の変遷と活動内容を辿り、必要に応じて、細分化と再統合をくり返す流動的な組織の構造を明らかにする。

このような組織の構造は、メンバーを固定せず、ネットワークを拡げていくという「生活をつづる会」の組織としての柔軟さを示すと同時に、そのなかでの人と人との結びつきの過程を問題として浮上させることとなる。多様なメンバーが、それぞれに個人の特殊な状況に密着した問題とそれにまつわる葛藤や矛盾を浮き彫りにできる空間を作り出すことは、互いを理解しあうために他者と向き合う時間のあり方と密接に結びついている。鶴見とメンバーらは、流動的な組織のなかでどのような時間を刻んできたのか。例会での話し合い記録と生活記録の作品に拠りながら、鶴見とメンバーらを結びつける時間について読み取っていく。

そして、「生活をつづる会」の活動のなかで、メンバーらはなにを書き、なにを話しあってきたのか。鶴見は、「生活をつづる会」の活動を通じて、「これまで書くひまも習慣もなかった」「主婦」が書くということを象徴的に表してきた。多様性を特徴とする「生活をつづる会」において、「主婦」を象徴的に示すということは、「主婦」以外の多くのメンバーらのさまざまな声が「主婦」を典型化していく過程であったといえる。その過程では、鶴見とメンバー、メンバー同士のあいだに相違が生じている。鶴見とメンバー、メンバー同士の意見や認識にどのような相違が生まれ、その相互の葛藤や相克の過程のなかで、描かれた「主婦」とはどのようなものなのか、話し合いの記録と生活記録の作品から分析する。

本発表は、第一次史料として、「生活をつづる会」を構成する小グループで、毎月行われていた例会での話し合いを記録したノート、プリント、メモを分析の中心とする。この資料は、京都文教大学大学院　図書館に所蔵されている鶴見和子文庫の未公開資料である。

資料の利用に関しては、科学研究費助成事業「『普通の人の哲学』と『知識人の思想』の葛藤をめぐる戦後思想史―鶴見和子文庫を開く　基盤研究（B)」（2008 年～2011 年、課題番号：20320019　代表：鵜飼正樹）の研究協力者として許可を得た。

※このレジュメは、2013 年 3 月 20 日-21 日開催の京都大学大学院教育学研究科国際シンポジウム「卓越した大学院拠点形成支援国際フォーラム　実践知と教育研究の未来」におけるポスター発表要綱集録の原稿を事務局の了解を得て、転載するものである。